

猿押～神峯

安芸・安田境界の尾根



名村川と安田川の分水嶺でもあるこの尾根は、元々人工林の中に多数の谷や尾根を形成し、所々昔の人が描いた道跡や家の跡の跡が点在する。展望はほとんどないが、人里離れた静かな山中で、春の送り葉が落ちた葉を踏み音と、時折、鹿の鳴き声と動物たちの気配を濃く感じながら歩きた。尾根には大木がいくつも生えている。春のこの時期、シヤカシ、フスノキなどの常緑広葉樹は古い葉をハラハラと落としている。新しい葉に押し出されて落ちているのか。新しい葉に自らやがて、枝を離れていくのか。後者はあれば救われる思いだ。

若宮神社
奥栗一谷林道の広場に若宮神社の小さな神柱がある。ゆるやかな尾根を歩くと銅板葺きの立派な社殿が名村川沿いに荘厳な雰囲気と漂わせて現れる。大変ご利益のある神様である。

奥栗
奥栗には明治時代尋常学校があった。昔平家落人が開拓して以来、鹿と竹を絡めてきたことだ。

下山の農道に出て神峯の展望台を探しているとき、地元のおばあさんが「おれ、おれ、展望台は高いけど、わかるわね」と教えてくれた。どうして見えて、あそこ（7）

高いつけわのさね、みえんがやけど...

大山岬
大正2(1913)年、四圍の現存水力発電所が完成し、運用開始

山穿る
春の山の彩りの変化の美しさにしても心をひきつけられる。若葉の芽吹き、山桜の薄紅色。奥山から海までつながるこの連山に木々たちが、今だけの色彩を添えて山を飾っている。



猿押山 888m
名村川源流
堀切 馬路往還
馬路
見晴良好
猿押山国有林 文化財備蓄林
馬路村
自動車でできるまでは、名村川の暴落は、それだけの山道で、密接につながり、人々の交流が活発に営まれていた。其落が地図から消え、その山道はとこぼりに形をどめて死んでいる。

名村川
猿押山 888m (安芸市と馬路村境) 源流地として、Vの字を描くように谷を深く刻みながら太平洋に向けて流れている。全長14.8km。流域には平家の伝説とともに、現在さまざまな不思議現象が起る「猿、タシカ」や「鹿」など、古い時代から人々が生活を営んできたことが伝わってくる。

水を自分の命、持ち時間として、川という人生の流路に乗って、死と海に向かっている。今のあたりを流れているのだろうか。海に着いたら、小さな水蒸気となって雲となり、水の輪廻をまわっているのだろうか...

安芸・安田境のこの山は、尾根が複雑に入りこみ、回廊の杭やピンポイントが、あちこちにあり大変難しく、迷い込んで何度もうつろしてしまおうコースだ。

あちこちが迷う。優柔不断に思いつく。思ふこと、迷ふことは計算すると、はらがる。コンピューターにはできない、人間だからこそのこと。

ヤクツバキはほとんどの花を、上に向けて仰向きに落ちる。こんな時だからこそ、上を向いて歩こう。

昭和40年代には奥栗に8軒、三軒家には3軒の家があった。今は全滅が植林されて当時の風景も想像することはむづかしいが、石垣を積んだ田畑の跡がある。ということは名村川に面した谷間の地形ながら日当たりも良く、木や建材、肥料になるマヤ広葉樹も多様に、手入れされた里山風景が、広がっている。ていねいな人々の暮らしが、あつたことだろう。

ちょっと聞いた話
伊豆郵便局に勤務していた乾氏は、約7年くらい前に19才の頃に奥栗・三軒家に電報を届けるため、花から谷を沿って入り、山を越えて歩いて行ったことがある。

現在92才の川島さんは、若い頃に三軒家で火事があつた。見に行つたことがある。

市役所OBの人に聞いた話では、奥栗一谷開設計画では三軒家と土捨場にする案があつた。名村の道は、接続案もあつたという。

シカの一粟
ニホンジカの問題は日本の森林にとって深刻な課題。安芸と安田で、(1)何頭が生息しているのだろうか。(2)もし、シカに参政権があるとすると、人間のほうが敗北してしまうんじゃないだろうか!と思われ、考へて(2020) 安芸市人口 266人 安田町 2454人